

生物資源管理学科のこの一年

岡野 寛治
生物資源管理学科長

学生の動向

2014年3月に62名の卒業生を送り出した。その内訳は、就職（および就職希望）が47名、大学院進学が13名であった。大学院への進学率が若干低下したことは残念に思う。また、今年も就職内定率は95.7%と、卒業時までには就職が決まらない学生が2名いたことは、大変気の毒であり、教職員の就職指導にいっそうの努力が必要であると痛感している。

昨年もこの学部報で述べたが、学部では3回生の年末時から就職活動が開始され、4回生での卒業研究・ゼミに十分な時間を取ることができない現状が続いている。大学の学士力が企業等から熱望される中、学部と大学院の一体教育が必要な状況となっていると小生は考える。今般の家庭の経済状況から難しい面もあるが、大学院への進学率のいっそうの向上が望まれる。

2013年4月には60名の新生を迎えることができた。学年別の学生数は、2014年3月末で、1回生60名、2回生60名、3回生61名、4回生以上5名である。昨年は4回生以上の人数が10名であったが、本人の努力により半減した。卒業遅延の事情は様々であるが、単位の取得数の少ないと思われる学生には、数度学科会議で確認後、各学生担当が当該学生に連絡を取り、事情を聞くよう努めた成果と思われる。

入試志願倍率については、特別選抜（推薦）入試についてのみ倍率が低調であり、定員を減らすことができるなら減らすことを願っている。

学科の動向

教員の移動に関しては、2013年4月に小谷先生が教授に、上町先生ならびに清水先生が准教授に昇任され、新たに農業微生物分野に泉津助教が着任された。さらに11月には土壤化学分野に飯村助教が着任された。若い力で本学科の教育研究活動がますます発展するものと信じている。

さらに、本年度末には、滋賀県立大学開学以来、本学科の教育・研究の大きな柱としてご奮闘頂いた昆虫生態学分野の沢田教授が定年退職されることとなった。先生には客員教授として今後4年間も、B6棟3階に研究室をかまえ、本学科のみならず本

学の教育研究活動に協力頂けることとなっ
ています。新年度からも、新たな陣容でカリキュラムの改善を進めながら、学生への教育と教員の研究活動がより充実したものになることを期待している。

環境科学研究科

環境計画学専攻のこの一年

金谷 健
環境計画学専攻長

本年度は、大学院のディプロマポリシー（DP）・カリキュラムポリシー（CP）を作成した他は、カリキュラムや履修に関して特に大きな変更はなかった。なお秋入学の実施有無について大学から検討依頼があったが、地域環境経営研究部門は「当面、実施は見合わせたい」、環境意匠研究部門は「実施の予定はない」と、回答した。

本年度の博士学位の授与者は、各部門1名ずつである。地域環境経営研究部門では、吳秀青（ハイルハン）さんが、6月の博士学位論文報告会を経て、「内モンゴルにおける農業開発と環境保全に関する研究」という論文題目で、7月25日に博士学位を授与されている（審査委員長増田教授、委員秋山教授、井手教授）。環境意匠研究部門では、趙冲（チヨウチュウ）さんが、7月の博士学位論文報告会を経て、「福建・港市の都市組織および住居類型の形成、変容に関する研究」という論文題目で、9月30日に博士学位を授与されている（審査委員長富島教授、委員村上教授、ホアン准教授、布野副学長）。

学生数（平成25年5月1日現在）は、地域環境経営研究部門が、博士前期課程12名（M1が6名、M2以上が6名）、博士後期課程6名（D1が2名、D2が1名、D3以上が3名）であり、環境意匠研究部門が、博士前期課程39名（M1が19名、M2以上が20名）、博士後期課程が5名（D1が2名、D2が1名、D3以上が2名）である。例年のことではあるが、地域環境経営研究部門の受験者を増やしていくことが課題である。

博士前期課程の修了者は、地域環境経営研究部門が4名（平成25年9月末修了の1名、M1での修了（入学時に近江環入授与済み）の1名を含む）、環境意匠研究部門が19名である。